あの日から11年、母の想いと共に走り続けてきた

佐藤 尚子
陸前高田市

東日本大震災から11年目を迎えた3月11日午後2時46分。岩手県陸前高田市の東日本大震災追悼式会場では、黙とうを捧げる多くの参列者と共に手話通訳を担う佐藤尚子さんの姿があった。今でも11年前のあの日のことは決して忘れることはないという。大津波に襲われ変わり果てた町を、全国手話通訳問題研究会岩手支部（以下「岩通研」）の仲間たちと奔走した日々を。余震が続き恐怖に苛まれながらも“情報を伝えなければならない手話通訳”の責務を理解していたからである。聴覚障がい者にとって、災害時の情報伝達は生命の存続を左右すると言っても過言ではない。尚子さんは、二人姉妹の次女である。4歳上の姉が病気による高熱が原因で聴力を失ったことから、物心ついた頃には手話との出会いがあった。「当時は障がい者に対する周囲の理解が得られない中で、母が生活を支えながら必死に姉を育てていたのをいつも傍らで見ていました。また、その姉の子も聴覚に障がいがあることから、家族の中で支え合いながら暮らしてきたことが、私の手話通訳の原点でもありました」と静かに語る。

※グラビアページでは、写真撮影の瞬間だけマスクを外していただきました。

▶写真❶
東日本大震災追悼式で手話通訳をする尚子さん。

▶写真❷
東日本大震災犠牲者鎮魂の碑。

▶尚子さんお気に入りの「箱根山」からの眺望。箱根山から復興祈念公園のある広田湾や松原を望む。11年前、この穏やかな風景を突然大津波が押し寄せ一変させた。

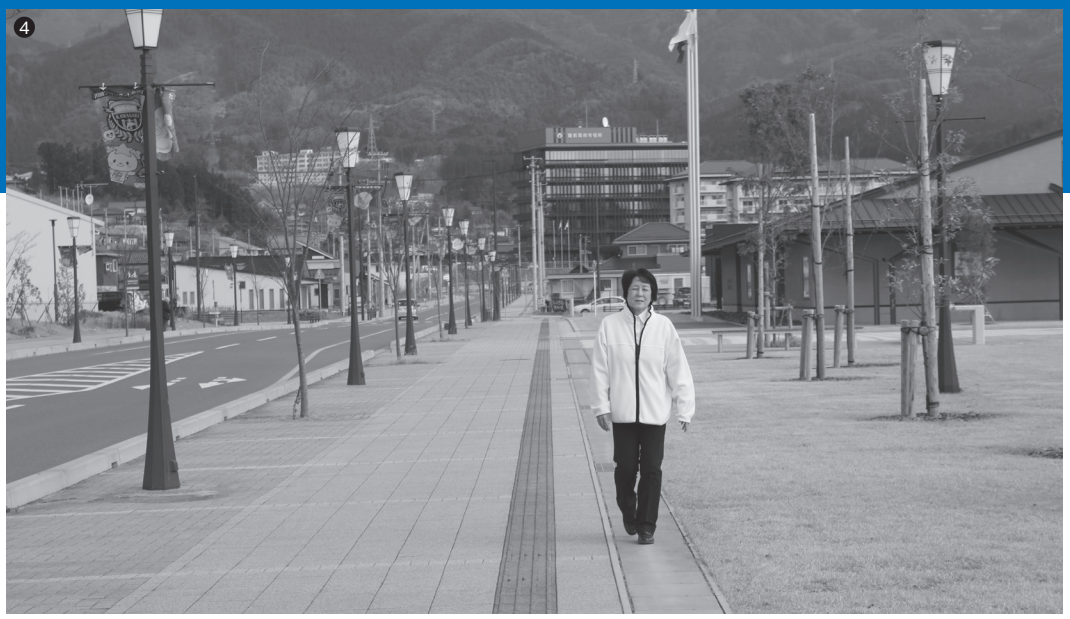
2011年3月11日、突然に普通のことが普通でなくなった

2011年1月、尚子さんの所属する手話サークルでは“災害時にあなたができること”と題した研修会が開催されていた。奇しくもその2か月後に東日本大震災が発災した。激しい揺れのあと、真っ黒な津波の襲来で町は壊滅的な状況に陥り、尚子さんの職場（陸前高田市社会福祉協議会）は建屋が全壊流失し、上司や同僚までも失ってしまった。避難者があふれる町の自動車学校の食堂を借り社協の看板を掲げた。連日相談者が相次ぎ、尚子さんたち社協職員は対応に追われた。そのような状況下で岩通研会員やサークル員が市内の聴覚障がい者を訪問し、情報を寄せてくれた。岩手県内のろうあ者相談員も市内の避難所に交代で入ってくれて、大変心強かったと尚子さんは振り返る。なかなか会えなかった岩手県聴覚障害者協会（以下「県聴協」）の気仙支部長と出会えた時は、仲間たちのことを語り合い、涙を流したという。

▶写真❶
手話サークルの打ち合せをする尚子さん。尚子さんは、社会福祉協議会の職員として地域の方々を支援する一方、手話サークル活動や手話通訳活動に日々邁進している。

▶写真❷
保健福祉総合センターにて。県聴協気仙支部長の田中さんと情報交換。

▶写真❸
BRT（JR大船渡線とJR気仙沼線が対象のバス高速輸送システム）の陸前高田駅の前で。



携帯電話が使えるようになると岩通研会員が情報サイトを立ち上げてくれて、そこから発信される情報は仲間たちの心の支えになった。発災から半年後の9月の休日には、市内の聴覚障がい者と新旧手話サークル会員数十名が顔を合わせ、近況報告会が行われた。それまでは、外出への不安から定期的な集まりを持つことは難しかったが、この日を機に、月1回休日に集まることを皆で約束した。尚子さんは「県聴協や岩通研、そして県手連の皆さんが交代で陸前高田においでいただいた時には、涙が出ました」としみじみと語る。大切な仲間を失い虚無感と無力感の中にいた尚子さんを救ってくれたのは仲間だったという。尚子さんは、震災の3日前に発行された手話サークル会報を手にし、届けることができなかった会員に思いを馳せ、“いのちの尊さと人と人とのつながりのありがたさをあらためて思い起こす”と、遠くを見つめながら静かに言葉を紡いでくれた。

いちばん大事なことは、いま生きていること、生きていくこと

▶写真❹
整備された陸前高田の町。かさ上げされて新しく生まれ変わった陸前高田の町を歩く。震災から11年が経過したが、今も広々とした空間が目立つ。本格的な町づくりはこれからだ。

▶写真❺
津波が襲った広田湾に面した高田松原津波復興祈念公園で。

母から姉へ、そして孫へ
その想いと教えが私の原点

尚子さんは語る。「4歳上の姉は、1歳半の時に高熱が原因で失聴しました。母は姉に生活面や世の中のことを厳しいくらいに教えていました。当時は聴覚障がい者への理解も不十分な時代であったので、母は生活するための術を教えることに必死だったのだと思います。日々の暮らしの中で母は姉とのコミュニケーションを最優先にし、ろう学校で手話を学び、片道2時間をかけて手話学習会にも参加していました」。そんな母の姿を見ることで、尚子さんは自然に手話と出会い、自らも手話に触れる機会を得たのだろう。お姉さんの子どもたちも聞こえづらいと分かった時、立ち上がったのはお母さんだった。孫へ積極的に話しかけ、畑作業にも連れて行き、自然に親しませ、さまざまなことを教えた。その姿は、お姉さんを育てていた時と重なり、お母さんの計り知れない家族への想いを感じたと尚子さんはいう。尚子さんは今、地域の手話通訳をしながら、陸前高田市社会福祉協議会で地域の方々を支援する仕事に携わっている。尚子さんの生きざまは、深い家族愛こそが原点と確信できる。

写真／文　佐藤 篤

▶写真❶ 佐藤尚子さんとお姉さんのご家族の皆さん。尚子さんのお姉さん夫婦とお姉さんの娘2人は、岩手県聴覚障害者協会の理事や専門部の役員として活動している。

▶写真❷ 楽しい団らんのひととき。お姉さんのご家族と一緒に。

▶写真❸ 娘たちを励まし続けたお母さん。米寿のお祝いにお孫さんたちからプレゼントが届き、うれしそう。

▶写真❹ お姉さんとの語らい。お姉さんは良き相談相手で、困ったり悩んだりしたとき、いつも励まし支えてくれる。